

5月1日

出エジプト
(詩篇114篇)

一 イスラエルがエジプトを出で、

ニ ヤコブの家が他言の民を離れた時、

ユダはその聖所となり、

イスラエルはその所領となった。

三 海は見て、逃げ去り、

ヨルダンは後に退いた。

四 山々は牡羊の如く躍る、

丘陵は羔の如く。

五 海よ、何でおまえは逃げ去るか。

ヨルダンよ、何で後に退くか。

六 山々よ、何で牡羊の如く躍るのか、

丘陵よ、何で羔の如く。

七 地よ、主のみ前に、

ヤコブの神のみ前に震えよ。

八 彼は岩を源泉に、

小石を水源に化し給うた。

信仰の英雄モーセによる出エジプトはイスラエルの歴史上劃期的な出来ごとであった。紅海をあのようにして渡った。そして曠野の旅ではマナの糧で飢えを凌いだ。岩からは泉が流れた。ヨシヤアによるヨルダン渡河も不思議な渡り方となった。神の力で曠野の旅をした揚句カナン入りをした事実を全身躍るが如き心境で一氣に詠っている。だから山々が躍って見えた。

出エジプトは、我々にとっては出我である。我を立ち出でて神・キリストに祈入する。そのとき神の「聖所」となる。聖靈の幕屋となる。その転換の焦点はキリストの十字架である。出我させる力は聖霊である。全的に脱我している根源現実である。

5月2日

私は愛する
(詩篇116: 1, 8, 16上)

私は愛する！ まことに神は聴いて下さる、わが声を、わが願いを。
寔にあなたはわが魂を死から、わが眼を涙から、わが足を転倒から
救い給うた。

私は願う、神よ！ 私があなたの僕たることを！

この詩の冒頭は、ただ「私は愛する！」と力強く叫んでいるだけだ。珍らしい断言だ。
「神は愛なり」と謂う。神の愛、キリストの愛に圧倒されると、その愛が全身に漲って
「私は愛である」となる。即ち「私は愛する」となる。こういう無条件の愛は絶対の恩恵
に因る告白である。神の愛の内容は同節後半と第八節である。

キリストは贖罪愛と復活の生命愛と聖霊愛を以て私たちを圧倒し給う。「わが愛に居れ」
と言い給うたキリストの中に投身せざるを得ない。愛の火花だ。かくて我々も「私は愛
だ」と告白できるようになる。愛は最大の力だ。この詩篇の冒頭のこの一言がこの詩篇の
全体である。ところで私もこの第八節のような体験をした。

一九二一年の秋、舎兄政美が北京で仆れた。看病も空しかった母と次兄が遺骨を抱いて
黄海を渡った。その船上で多年の過労と悲歎のため母は失明した。遺骨を抱いて帰って来
た失明の母を迎えて、わが魂は死に面し、わが眼の涙は涸れ、私は畳に平伏した。天地晦
冥！ その後キリストは私を抱き給うた。私はキリストの僕となった。爾来六十七年！
この母とこの兄のゆえに、福音のため地上にある限り弔合戦をせざるを得ない。

5月3日

神はわが力、わが歌、わが救
(詩篇118：1-18前半)

神(エホバ)に感謝せよ、恵福めぐみ深くその愛は永遠なればなり。(二一八・二)
神(エホバ)はわが方かたに在ます、我は怖れず、ひと我に何をなし得んや。(六)
神(エホバ)に依り頼むは人にたよるよりも勝りて善い哉。(八)
神(エホバ)はわが力わが絃歌つたかたにしてわが救となり給へり。(一四) (一五)
歡喜こひこひと救済すくいの聲は義人の幕屋まぐらにあり、神(エホバ)の右手は強き業わざを為し給ふ。
我死(ヤハ)なずして生き存へ、神(ヤハ)のみ業を語り伝へん。(二七)
神(ヤハ)はいたく我を懲らしめ給ひしが、死には渡し給はざりき。(二八)

本詩第一節は最後の第二九節と同じで、神の愛が永遠不変であることを高らかに讃美している。旧約のこのヘセド(HESSED)愛という語はツエデク(ZEDEK)義と共に重要な語である。神の愛の相は時と場合に依じて千様万態であるが、愛であることに於ては永遠不変で、神は愛に価しない惨憺たる人間私を愛し貫いて下さっている。その神の愛の体現者はキリストで、彼の愛も義も無条件に賜はる。それが恵である。かかる神、キリストに立ち帰ってやまぬ人間の在り方が信仰、信行、信交である。これが神を愛するといふことだ。

このような愛の神が第十四節の「わが力」、「わが歌」、「わが救」である。第十七節はルターがコーブルク城幽居の際に貼紙をして祈った聖句で私はこの眼で見て来た。

5月4日

すみ おやいし
隅の首石

(詩篇第118：19—29後半)

我に義の門開け、我その中に入りて神に感謝せん。(二一八・一九)

是は神の門なり、義人はその中に入るべし。(二〇)

建築師らの棄てたる石は隅の首石となれり。(二二)

是は神に由ることにして我らの根に奇異とするところなり。(二三)

神よ、願はくは今救ひ給へ、神よ願はくは今栄えしめ給へ。(二五)

神は神なり、彼は我らに光を与へ給へり。(二七)

汝はわが神なり我汝に感謝す。わが神よ、我汝を崇めまつらん。

(二八)

神に感謝せよ、恵福深く、その愛は永遠なればなり。(二九)

我々にとって義の門とは何か。「我は門」なりと言ったキリストこそ、義の門である。

神の義人キリストの門を平伏して通れば、彼の義が与えられる。

さて専門的宗教人たる教法師や祭司やバリサイ人に排斥され、大衆にも裏ぎられ、弟子

供にも理解されず、棄てられた石(マタイ二一・四二、ルカ二〇・一七、行伝四・一一、ロマ九・三三、

一〇・一一、エペソ二・二〇、ペテロ前二・六・八)となったキリストは家の礎石として最も大切な隅

の首石となった。即ちキリストは人間界の精神的、宗教界の靈的中心となった。イザヤが

「試煉を経た石、貴き隅石」と預言したのはキリストであつた(イザヤ二八・一六)。実存主は

5月5日

神の護り
(詩篇第121篇)

「私は眼をあげる、あの山山に。

どこから来るかわが救助。

わが救助は神からだ、

天地の創造主なる。」

「彼は汝が脚を蹢躅に棄ておかし、

汝が守護者は微睡給はじ、

見よ！ 微睡まず、熟睡り給はず。

イスラエルの守護者は。

神は汝が守護者、

汝が右手を掩う翳。

昼は陽が、夜は月も

汝れを撃たず。

神は汝を護り総ての禍害を免れしめ、

汝が魂身を護り給う。

神は汝が出入りを護り給う、

今から永遠に！」

この詩は巡礼の歌の一つである。人生巡礼の目指す青山は何だ。霊界のバラダイスに聳え立つ霊峰ではないか。霊峰富士を想はせるような山ではないか。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。日々旅にして、旅を栖とす。」と言った漂泊の俳聖芭蕉はまことに人生の旅人であった。我々も好むと好まざるに拘らず劇的な悲喜の渦巻く旅路を誰しも辿らされている。「我れ想う故に我在り」でもなく、「考へる章」でも収まらない人生である。天つ方ふりさけ仰いで白雲の彼方、光の里に在ます神、超在し、遍在し、貫在し、内在し給う霊なる神、愛なる神、力強き神・キリストに気がついたら、もう大丈夫。彼に托はこの詩人の謳っている「守護者」である。日射病、月射病、諸々の被害から二六時中護って下さる。

5月6日

涙の種子、^{たば}喜びの禾束
(詩篇126篇)

神がシオン^{一エホバ}の命数^{さだめ}を転^かえた時、

我らは夢^ニみる者の如くであつた。

その時の笑声^{わらい}は我らの口に満ち、

歓声^{よろこび}は舌にあふれた。

その時諸国の民が言つた、

「神は彼らに大いなる業^{わざ}を作した」と。

神我らに大いなる業^{ミエホバ}を作し給うたので、

我らは^{四エホバ}歓喜の人となつた。

神よ、我らの命数^{さだめ}を転^かえ給え、

南方^{みなみ}の諸々の川の如くに。

涙^五と共に播く人は

歓声^{よろこび}と共に刈り獲る。

彼は涙しながら出て往つた、

種子袋をたづさえて。

彼は歓呼^{たば}して帰つて来る、
おのが禾束^{たば}をたづさえて！

この詩は、南王国ユダの都エルサレムがバビロニア軍に占領されて都の主な住民がバビロンに捕囚の運命となつた(紀前五八七—五三八)、その捕囚の命数をエルサレム帰還に転じた神の歴史的転換の恵みを夢かとはかり歓んだ際の歌である。

シオンとは原語ツィオーンで「要害」を意味する語で、ダビデがエルサレムのこの要害の丘を中心に都を建てた(サム後五・七)、シオンは終末的な神の都をも意味する。

出エジプトは苦難からの解放であつたが出バビロンは不信の罪に由来するバビロン捕囚という服役からの解放であつて、神の恵みの現実への帰入である。

我々の生涯でも涙の種子を撒かしめられて、幾十年かあとで^い喜びの禾束を刈りとつた時には！

5月7日

深淵・待晨
(詩篇第130篇)

神^(エホバ)よ、^{あなた}汝をこの深淵から私は呼ぶ。
主よ、わが声を聴き給え、
神^(エホバ)よ、^{わが}願いの声に汝が耳を傾け給え。
神^(エホバ)よ、汝がもし不義に眼をとめたら、
主よ、誰が立ち得ましょう。
だが汝のみ許には赦しがある。
私^(エホバ)は神を待ち望む、わが魂は待ち望む。
私は聖言に望みを抱く。
わが魂の主を待つや、
衛士が晨を待つにも優る。
イスラエルよ、神^(エホバ)に望みを抱け。
それは神の許に恩恵があり、
救贖は彼の許に豊かにあるから。
彼こそはイスラエルを贖う、
その不義のすべてから。

呼ぶ者は深淵にいる。呼ばれる神は天界に在ります。天は高い、淵は深い。最も隔っているが、実は天空は淵の面に接している。絶対界の神も相対界の人間にそのように接し給う。至高至上にして永遠に在り給う聖者たる神は心砕けた謙る者と共に住み、その霊を活かし、その心を活かす、と第三イザヤは語る(イザヤ五七・一五)。
人間は誰でも惨憺たる者だ、どんなに立派そうに見えても天国と地獄の、光と闇の交錯の中にいる。だから偉大な宗教家はこれを正直に認め、自己と戦って、救済の道を切り拓いた、否救済されたのであった。救を要しない人は一人もいない。永遠の晨を待っている、個人も人類も。その天国待晨の曙光は何処にあるか。我らの胸の中に臨んでくる。キリストの贖罪と復活と聖霊の恩寵が天国をわが胸の中に創造した。

5月8日

思慕の魂
(詩篇第137篇)

バベルの河^ベ辺、とある所に我らは坐り、
 つらつらシオンを偲^{おも}びつつ^{なみだ}泣した。
 柳のさなかにわれらは立^キ琴^ンを懸^ルけた。
 そは我らを捕えた者らが歌^{うた}詞を求め、
 我らを苦しめた者らが楽^{うた}しみを求めて、
 「我らの為にシオンの歌を歌え」
 と言^いったから。
 どうして我らは神^{エホバ}の歌を
 異境の地で歌えようか。
 エルサレムよ、もし私が汝^なれを忘れたら、
 わが右手は……忘^{わす}れる。
 もし私が汝^なれを想はないなら、
 わが舌はあぎとについでしま^うう。
 もし私がエルサレムを
 わが歡喜の首^{かみ}に戴^かかないなら。

この詩篇はバビロン捕囚からエルサレムに帰還して間もない時に書かれたものであろう。エルサレムのシオンの丘は神殿のある聖山で、礼拝の本山であるから、ユダヤ教徒にとっては魂の思慕してやまない神の都である。捕囚中は勿論ソロモンの神殿は破壊されて存在してはいなかったにも拘らず慕はしくてな^なないから、心の中では小さな立^キ琴^ンを弾いて神を讃えていたのであった。国亡びて山河ありではなく、国亡ぶとも經典あり、讃歌(詩篇)あり、しかもそれは暗誦されているから魂の中に記されてある。自分自身が生ける經典、生ける楽器、生ける讃歌である。異邦人のなぐさみに聞かせる楽器も声もない。ひたすら神を讃美するためである。この詩篇の作者の如き魂の在り方こそ本当の讃歌的存在である。

5月9日

汝知り給う
(詩篇第139篇)

汝^一は知り給う我が座るをも立つをも、
汝^二は弁^{わきま}え給う遠くからわが想いをも。
げにわが舌^三に一言もないのに、
見よ、神よ、汝はその総てを知り給う。
後^四べより前方^{かた}より汝は私を包み、
しかも私に按手し給うた。
靈^五すしき哉、及びもつかぬ知なる哉、
高き哉、到底^{これ}是に如くべくもない。
私^七は何処^{いづこ}へ往^ゆつて汝がみ靈^{たま}を離れようや、
何処^{どこ}へ遁^{のが}れて汝がみ顔を離れようや。
たとい天に昇るとも、そこにあなたが！
わが床^{とこ}を陰府^{よみ}に布くと、見よ汝が。
誠^{まこと}に汝はわが五臓をつくり、
わが母の胎に私を組み成し給うた。
神よ、私に汝が思念は如何に貴き哉！
その総体は如何に雄大なる哉！

神なる汝と人なる我との一対一の深い関係を「知る」という言葉で徹底的に告白している特異な詩篇である。男と女の深い人格関係並びに肉体関係もイスラエル人はこの「知る」という語で表わす。であるから、神が知り給うというときは、靈的な知であり、深い愛を以ての全人的な「知る」である。よく時代劇などで「お天道さんは知ってござる」などというように、「汝知り給う」は深い慰めであり、力である。

禪道では「声前の一言千聖不伝」というが、第四節の如く神は靈知し給う。祈らぬ前に祈りの内容を知り給う。神は知るのみでなく手を按いて護り給う。力を与え給う。他人にどんなに誤解されようと迫害されようと、「汝知り給う」！そこに大平安がある。神の大愛の知に全托せん哉。

5月10日

あなた かぐれみの
汝を 隠 義とする
(詩篇第143篇)

神よ、わが祈りを聴き、

わが願いに耳を傾け、

汝が 信実と汝が 義 に在って

答え給え。

汝が僕の審判に関わり給うな。

そは、生者は誰もみ前に義とされず。

私は昔の日を思い出し、

汝が業のすべてを思いめぐらし、

汝が手の業を考える。

汝に向ってわが手を上げ、

わが魂は乾地の如く汝に喘ぐ。

仇敵から私を救って下さい、実存主よ、

あなたを私は隠義とする。

実存主よ、聖名のゆえに私を生かし、

汝が義に在ってわが魂を患難から

引き出だし給え。

我々の祈りや願いは全身的な投入の相が本当だ。これに対して神さまの応答は、「信実と義に在って」という。信実は「アーメン」という語と同根、不変一貫の「然り」で裏切らない肯定の心で、相手を信じ抜いて救う心である。義も大切な語でツエデクと同根、天地を貫く義で、神意一貫の救の意志である。神の信義はキリストが体現した。神・キリストの信義はこれを与え給うことによって我々を救う。(ローマ・一七)。

「昔の日」！ 私も恩寵を回顧して想い出されるのは長兄政美の実存だ。彼在つての今日の私だ！

隠義！ 然り、我々はキリストを唯一の隠義とする。これは何ものも害することのできない金城鉄壁以上のものだ。キリストの力強い愛にまさるものはない。

5月11日

大愛大能の神
(詩篇第145篇)

三
実存主は偉大なり大に讃べき哉

四
彼の偉大さは探ぬるべくも無し。
代は代に汝がみ業を讃め、

ハ
汝が大能の力を宣べつたえん。
実存主は恵みと憐情に深く、

五
怒ることおそく、愛は大いなり。
実存主はすべて倒るる者を支へ、

六
すべて屈する者を起きあがらしむ。
実存主はすべての道に於て義しく、

七
そのすべての業に於て愛深く。
実存主はすべて彼を呼ぶ者、

八
信実をもて彼を呼ぶ者に近し。
彼を畏るる者の樂しみを彼は成し、

九
彼らの叫びを聴きて救ひ給ふ。
彼を愛する者総てを實存主は護り、

悪しき者総てを滅ぼし給ふ。

この詩篇は所謂イロハ歌の一つで、各節の第一語がABC順の頭字になっている。

実存の神、万物万民の主たる神は偉大である。否絶大である。到底端倪すべからざる神である。然り、我々に理解できる神があるなら、そんなのは神ではない。絶対界の神が絶対界に自現して驚くべき業を成して証し給う。しかも根源現実には深く隠されている。人間の側がどうであらうと、神の愛は底知れぬものだ。だから信ぜざるを得ない。投身せざるを得ない。第十七節は何たる福音ぞや！
「彼を愛する者」とは何ぞ、神・キリストの愛に圧倒されるから、愛せざるを得ないまでのなした。「悪しき者」とは何ぞ、善悪の悪ではない。神の深い愛を拒む者だ、サタンに与する者だ。

5月12日

万象の讃美
(詩篇第148篇)

讃美せよ汝ら神を！

実存主を讃美せよ、諸々の天から。

彼を讃美せよ、諸々の高所で。

彼を讃美せよ、すべての天使よ。

彼を讃美せよ、すべての天軍よ。

彼を讃美せよ、陽と月よ。

彼を讃美せよ、すべて輝く星辰よ。

実存主を讃美せよ、大地から。

龍とすべての深淵よ。

火炎と霰よ、雪と霧よ、

み言を行う暴風よ。

若者たちよ、また乙女らよ、

老いたるも若きも共に。

彼は一つの角をみ民のために揚げ給うた。

これは彼の恵信者すべての、

イスラエルの子らの讃美の権化ぞ！

詩篇第一四六一一五〇は皆「ハレルヤ讃歌」で、この第一四八がその最たるもの。自然界及び人間の万象に向って神讃美を称揚している。詩篇第一〇四篇参照。

この詩で注目すべきは第十四節の「一つの角(ケレン)」である。「角」は神の威力の象徴で受容者の力である。メシヤは福音の角度からはキリストである。キリスト預言として詩第八九・三、四、一七、一八、第一三二・一七、一八を参照。メシヤの預言的存在はダビデ(マタイ一・一)。

この詩篇に応じてアッシジのフランチェスコの「被造物の頌歌」、別名「太陽の讃歌」がある。天地相应えて、神を讃美する相は正に宇宙的パラダイスである。

5月13日

エステル
(エステル書)

○茲にシュシャン（スサ、ペルシャの都）の城に一人のユダヤ人あり、その名をモルデカイと曰ひ、ベニヤミン人なり。彼はバビロン王ネブカデネザルが携へゆきしユダ王エコニヤと共に掬はれ往ける俘囚の中にありてエルサレムより移されたる者なり。彼その叔父の娘ハダッサ（「桃金娘」へブライ語）即ちエステル（「星」の意ペルシャ語スタラ）を養ひ育てたり。この乙女、顔貌優美なりけり。

○王すべての処女に超えてエステルを愛しければ、エステルは凡ての処女に優りて王の前に恩寵と情愛を得たり。（二・五・七、一七、一八）

学問的な問題は茲に取り扱はないが、物語によるとペルシャ王アハシュエロス（クセルクス）の重臣ハマンが王を殺さんとたくらみを抱いていたが、それを知らぬ王はハマンに対して「ハイル・ハマン」的な拝跪を一般に命じた。これをモルデカイは拒んだ。ハマンはモルデカイのみかすべての在住のユダヤ人殺害の陰謀を企てた。王はその間ハマンの王への反逆心を知るや、ハマンはモルデカイを傑刑にせんとした柱で自分が殺されることになる。エステルは終始モルデカイの味方となって王に執り成し、神の名を一言も挙げずして、聖名に在って生きぬき、モルデカイとエステルは多くのユダヤ人の生命を安泰ならしめた。アダル月（十二月）十四、十五日をブリムの祭としてイスラエルではエステル書を読んで感謝している（九・二一、二二）。美しき星の栄光かな。

5月14日

我唯だ汝らのみを知る
(アモス書1-3)

○ユダの三の罪、四の罪に対して我これを棄ておかじ。彼らはエホバの律法を拒みその誠を遵らず。我諸殿を焚かん。(三・四、五)

○イスラエルの三の罪、四の罪に対して、我これを棄ておかじ。彼らは義しき人を銀のために売り、貧者を鞋一足のために売る。男もその父も一人の乙女に行きてわが聖き名を汚す。(三・六、七)

◎他のすべての種族の中にて唯汝らのみを知れり。されば我汝らの総ての罪を汝らに糾さん。(三・二)

南王国ユダの南方山地の東部にテコアという山村がある。その曠野で牧養をしていた男があった。彼は桑の木も栽培していた(七・一四)。しかし彼はアッシリヤとエジプトの二大国の板ばさみになっている北イスラエル、南ユダ両国の運命と不信と罪過甚だしき国状に想いを致す憂國の士であった。頃は紀前八世紀半、ユダの王ウジヤ、イスラエルの王ヤラベアムの治世、地震の二年前に突如エホバの召命を受け、預言者として立たしめられた。危機迫れる北イスラエル國の首都サマリヤに赴き、「獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや、主エホバもの言ひ給ふ、誰か預言せざらんや」(三・八)と叫んだ。神は当時の四隣の諸種族の罪過を先づ列挙して、終りにユダとイスラエルの罪を右掲の如く(これは一端に過ぎない)言挙げし、しかも、「我唯汝らのみを知る!」と宣うた。神が如何にイスラエル・ユダを深く顧みているかの深遠な言なのである。

5月15日

公道・正義の本流
(アモス書4-6)

○我汝らの総ての町にて汝らの齒を清からしめ、汝らの総ての処にて汝らの食を乏しからしめたり。然るに汝らは我に帰らず、と神言ひ給ふ。(四・六)

○これは挽歌なり、処女イスラエルは仆れて復た起きず、彼女はおのが地にうち倒さる。扶け起こす者なし。前に千人出でし町は百人、前に百人出でし町はたゞ十人のみ残らん。(五・一、二、三)

◎公道を水の如くに正義を尽きざる河の如くに流れしめよ！(五・三四)

北イスラエル国の神エホバに対する不信とそれに由来する社会的腐敗紊乱には言語道断なるものあり。国が栄えて驕慢の風潮が蔓延すると栄枯盛衰の歴史的法則をまぬがれず、衰退してゆく。北イスラエル国は没落寸前の爛熟期に來ている。エホバの神はアモスを通して神との關係を立て直すために、しきりに「我に帰れ」と促して來たが「然るに汝らは我に帰らなかつた」と歎き且つ怒り給う。「齒を清からしめた」とは自然界に飢饉を招いて食糧難を來らせ、民に警告を發した婉曲的表現である。神に「帰る」という言葉はどの預言者も波の音の如く響かせている。アモスは神からの義の要求に應じて「公道」や「正義」を叫んだが、民が神に立ち帰って神との義の關係に入らなかつたから、社会に義の実践的な果を結ぶわけにゆかなかつたのである。

5月16日

「汝何を見るや」
(アモス書7-9)

◎エホバ我に向ひて、アモス汝何を見るや、と。我れ準繩^{はかりなわ}を見る、

と主再た言ひ給はく、我再び彼らを見過ごしにせじ。(アモス七・八)

◎エホバ我に向ひて、アモス汝何を見るや、と。我れ熟したる果物^{くだもの}

一籠^{かご}を見る、と答へしに、エホバ我に言ひ給はく、わが民イスラ

エルの終末^{をり}到れり、我再び彼らを見過ごしにせじ。(アモス八・二)

○主エホバ言ひ給ふ、視よ、日至らんとす、その時われ饑饉^{エホバ}をこの

国に送らん。是はパンの乏しきに非ず、水に渇くに非ず、神の言

を聴くことの饑饉なり。(アモス八・一二)

預言者はよく神から「汝何を見るや」と訊ねられる。預言者は人間界や自然界の諸現象、諸現象に於て神の啓示を察知するからである。牧場の荒蕪に於て神の歎きを、山林の枯葉に於て神の怒りをアモスは見た(一・二)。ここでは準繩に於て神の厳しい審判を見る(七・八)。また爛熟した一籠の果物に於てイスラエルの滅亡の徴を見ている(八・二)。我らもそのような眼や耳を有たん。

食物の饑饉もさることながら、神の言にさっぱり耳を傾けない国民のたましいの飢饉こそ最も憂うべきことだと警告している。このことは現にわが国に対してアモスが警告しているわけである(八・一二)。神の審判が徹底的に臨むことをアモスは第九章一―六節に於て疊みかけて警鐘乱打の如く語っている。アモスの使命は実に義の神を示すにあった。

5月17日

ホセアの悲劇的結婚

(ホセア書1-2)

○神^{エホバ}ホセアに宣^{のたま}はく、汝生きて淫行^{ゼヌニム}の女を娶^{めと}り、淫行の子等を取れ。そはこの地神^{エホバ}より離反して淫行また淫行なればなり。(ホセア一・二)

○汝らの母と論^{あげつら}諍へ、論^{あげつら}諍へ、彼女はおが妻に非ず。我は彼女の夫に非ざるなり。汝らその乳房の間より姦淫^{おほやけ}を去らしめよ。(二・二(四))

○我汝を娶りて永遠に到らん、義と公平^{おほやけ}と愛と憐憫^{あはれみ}とをもて汝を娶り、信実をもて汝を娶るべし、かくて汝神^{エホバ}を知るに到るべし(二・一九、二〇)。

アモスと時期を殆ど同じうし、彼に繼いで北王国滅亡の夕暮に現はれたのが、この預言者ホセア(「神は救い給う」の意)であった。彼はアモスが神の審判の義を叫んだのに対して、神の赦しの愛を、彼自身の悲劇的結婚生活を以て象徴的に伝えるという神の召命を受けたのであった。即ち売春婦の如き女(多分神殿を汚す聖娼^{ケンヤ})を娶った。併し彼女は相変らずの淫行^{ポルヌ}で、二人の男子と一人の女子を生んだ(一・四、六、九)。恋人たちをもつこの不貞の女は、バールの神々を拜んで宗教的姦淫を犯している北イスラエル国民の象徴の如き女である。淫行の果である子らがこの母親を論難しても実は無効である。

神はこの不信の民を顧みて、曠野に伴れ出し、懇ろに語り、葡萄園を与え、患難の谷で希望の門を開き、いつの日か全世界から戦争を止めさせ、神の義を与え、神の愛を与えてイスラエル民族を妻として愛し、永遠に到るとホセアに啓示した(二・一四―二三参照)。

5月18日

神の深き顧みの愛
(ホセア書3)

一 エホバ 神 我に宣はく、汝再び往きて妻を愛せよ、他人と相愛し姦淫をなし居る彼女を。そは恰もイスラエルの子ら他神々に転向し「バアルへの供物なる」乾葡萄の菓子を愛好し居る彼らを我が愛するが如くにせよ。かくて我銀十五シエケルと大麦一ホメル半を払いて彼女を獲たり。

我れ彼女に言ひけるは、汝多くの日わが許に留まりて姦淫する勿れ、他の男の許に居る勿れ。我もまた汝に対して然かせん！(三・一、二、三)

ホセア第三章はホセア書の焦点！ 神意に由り淫婦を娶ったが相変らず姦淫を犯す彼女である。神命を受けてホセアは彼女を奴隷一人を贖う身代金で購入した。想へ！これはユダがキリストを売った金額である(マタイ二六・一五)。もう姦淫はやめたよ。私の許にずっと居なさい。私もお前にそうするから。ホセアは自分をどん底の彼女の境地に落して彼女を抱いたのである。これはイエスが姦淫の女に「我も汝を罪せじ」といってその心身を救い揚げた、あのキリストの愛の実存的預言である(ヨハネ八・二一―参照)。エホバ神の深い顧みの愛。

5月19日

わが歡喜は愛にあり
(ホセア6-10)

○来たれ、我ら神に帰るべし。そは神我らを抓裂きたれどもまた醫し給ひ、我らを打ちたれどもまた繃帶をなし給へばなり。(ホセア六・二)
◎わが歡喜は愛にあり、犠牲に非ず。神を知るを悦ぶこと燔祭に優る。(六・六)

○エフライムは異邦人に入り交る。彼は裏返さざる煎餅となれり。

○刑罰の日来り、応報の日到れり、イスラエルは知れ、預言者は愚直なる者、霊の人は狂へる者なり。これ汝の罪惡多くして汝の怨恨大いなるに因る。(以上七・八、九・七)

国家の滅亡の危機に際してホセアはどこまでもエホバへの信仰的復帰を促してやまない。民族の興亡は国家の政治的興亡とは次元が異なり。預言者に導かれていたイスラエル民族の根強さはエホバ神とその經典を有しているところにある。神の生殺与奪は信仰的実存の有無に關はる。しかも神は究極的には民族を救はんとする本願をもっている。だからそういう神を知れと叫ぶ。神に帰らない民は火に焙つて裏返しをしない煎餅の如く、やがて戦火に焼かれてしまう。祭儀的宗教が信仰ではない。神の愛を体現するのが生きた信仰である(六・六)。預言者は神の言をそのまま伝えるから世人にはバカに見える。狂人の如くである。しかしどちらが狂っているのか。太陽は何と見てござるか。傍若無神の民は遂に国の滅亡を刈り獲る運命を自ら招くのである。

5月20日

神の愛の網
(ホセア書11-13)

◎イスラエルの幼年期に我これを愛し、エジプトよりわが子として呼び出せり。我れ人の網たる愛の網もて彼らを索けり。(二・一、四)

○エフライムよ、我いかで汝を渡さんや、イスラエルよ、我いかで汝を譲らんや。わが心わが衷に翻へり、わが憐れごとく燃え起これり。(二・八)

○陰府の手より我彼らを贖はん。死より彼らを救ひ出ださん。死よ汝の疫病は何処にありや、陰府よ汝の業病は何処にありや。(三・一四)

預言者ホセアは熱い愛の人である。それだけにまたイスラエル国の不義淪落の相に歎きと憤りを感じ、命旦夕に迫っている滅亡——それは紀前七二一年、アッシリヤのサルゴン王軍の残虐な剣による首都サマリヤの陥落——を深く悲んでいた。それゆえ、ホセア書は悲歎と憤激と愛憐の渦を巻いた劇的な文字である。しかしその中で愛憐の文字が最も強く神の救済を約束している。右掲の諸句はその著しき表現の二、三である。

第十三章第十四節は、パウロがコリント前書第十五章でキリストの復活の告白を展開している際その第五節で引用している有名な句である。新約聖書で旧約の聖句が引用される場合キリストの福音の光で変光される。

5月21日

選民への終末的希望
(ホセア書13:15-14:9〔10〕)

立ち帰れ噫イスラエル汝が神実存主に。

それは汝汝が不義のため仆れたれば！

我は彼らの離反を医し快く彼らを愛せん

わが怒り彼より去りたればなり。

我れ露に如かんイスラエルには。

彼百合の如く花咲かん。

彼その根をばうち張らんレバノンの如。

その枝は伸びゆきてその美麗さ

橄欖に比ふべし

その芳香さレバノンの如き哉。

彼ら帰り来てわが蔭に住まはん。

穀の如く(実り)、葡萄の如く花咲き、

その馨香レバノンの酒の如き乎。

エフライム(曰く)、最早我に偶像は何ぞ。

我(之に)応へ顧るなり。我は蒼翠の

樅の如し、汝我より汝が果を得べし。

神への不信不義のため遂にアッシリヤに紀前七二一年に亡ぼされた絶望的なイスラエルに対しても神は希望を棄て給はない。その内容に終末的希望である。第四節は慰め深い言である。第五節以降の詩句はまことに美しい。神は自らを露に譬えてなくさめるあたり、いかにもホセアへの神の言である。またイスラエルの美しい自然の代表たるレバノンの香柏、橄欖、樅、葡萄の如き貴重な樹木、シャロンの百合などを列挙してバラダイスを想はしめている。しかも注目すべきはこれらの自然はわが諸相である。まことにホセアらしき情感ゆたかな表現である。国の興亡如何に拘らず民族の選びは不変というところにエホバの神の不変の愛がある。

5月22日

終末的平和の祈求

(ミカ書1-4)

○然れども我は神の御霊の許、力に満ち、公義と勇氣に溢れてあれば、ヤコブにその不義を宣し、イスラエルにその罪を告げん。

○末の日到らば、神の殿の山は諸々の山の巔に礎えられ、諸々の峰より高く聳え、諸々の民はこれに流れ帰せん。神は多くの民の間を審判き、遠隔に到るまで列強の仲裁をなし給はん。斯くて彼らはその剣をうち変えて鋤となし、その槍を変えて鎌となさん。国は国に向ひて剣を挙げず、最早戦争のことを攻究せざるべし。まことにすべての国民は夫々その神の名に在って歩まん。されど我らは我らの神エホバの名に在って永遠に歩まん。(ミカ三・八、四・一、三、五)

預言者ミカ(語意「誰か如かん」(エホバに))は預言者イザヤと同時代、ユダの王、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの代即ち紀前八世紀後半の頃、カナン西南部の山陵地帯の村モレシテ出身の剛直な田舎人である。彼もアモスの如く、ユダ・イスラエルの神に対する不義、社会的権力者の罪を指摘し神の審判を力強く語っている(二・三章)。神霊を体受している預言者は何者も懼れないからである。「末の日」とは歴史的終末の日のことで高い次元の内容が啓示されている。右掲の詩句がそれで、二十世紀の今日は、凡そこの預言とは正反對の現実である。内村鑑三が一九〇七年に見た「初夢」「恩恵の露、富士山頂に降り、滴りてその麓を霑し、溢れて東西の二流となり云々」というキリストの世界平和を連想する。

5月23日

神と共に歩む

(ミカ書5-6)

○汝エフラタのベツレヘムユダの氏族中にいと小さき存在よ！
汝の中よりわがためイスラエルの君主と成る者現はれん。彼の出現
は永遠の古昔からの事なり。(五・二)

◎彼汝に告げ給へり、人よ、善きことの何なるか、神の汝に求め給
うことの何なるかを。公義を行じ、愛隣を愛し、遜り汝の神と共に
歩むことに他ならずや。(六・八)

まことに不思議な預言がミカに啓示された。即ちベツレヘム(語意「パンの家」)に数
百年後救主キリストが出現したことに冥合している。選民イスラエル民族の中に神の国の
ため震はれずして遺される少数者がいる。天来の恵みの存在を露や雨に譬えたり、草木に
譬えたりするところを見るとイスラエル人は自然を人間存在の不可欠のものとして深く愛
している消息がわかる。現代ほど自然をそこねている時代は未曾有であろう。ゲートは自
然を勝手に利用したらそのうちに人類は困るときが来ると言った。その徴候は歴然として
いる。神の求め給う善とは、平伏して神意に従いつつ神と共に歩むことなり、とのミカの
福音は、アモスの神の義、ホセアの神の愛に継いで、神との共在に展開して来た。神と二
にして一如的な実存となれば、神の義に生き、神の愛に生きる現実が生じてくる。これを
完璧に体现したのがベツレヘムの星の下に出現したナザレ人イエスであった。

5月24日

誰か汝の如き神在らんや！

(ミカ書7)

○我神^{セエホバ}を仰ぎ瞻^みる。我はわが救の神を待ち望む。わが神は我に聴き給ふ。わが敵^ハよ我につきて喜ぶ勿れ、我仆^{たは}るれば起きあがる。幽暗^{くらき}に坐すれば神わが光となり給ふ。(ミカ七・七、八)

◎誰か汝の如き神あらんや！ 罪を赦し、その嗣業^{ゆづり}の遺れる者の不義を見過^ごし給ふ者。永劫に御怒りを保ち給はず、愛憐^{いれん}を深く念とし給う者。彼は再び我らを憐み、我らの不義を踏みつけ、我らの罪を海の底に投げ入れ給うなり。(ミカ七・一八、一九)

まことの預言者は民の罪過を忌憚なく糾断するが、同時に彼は民の罪をおのが罪として痛むのである。ひとの罪過を糾断するばかりなら、それはバリサイ根性でキリストの最も非とされた根性である。即ちおのれを義とし、他を見くだす高慢であつてサタンのとなる。ミカは決してそのような似而非^ぎ預言者ではない。彼は闇の中でも神の光に照されて身辺に光を流すような存在である。遺れる者、選^えびの器にも失敗はある。平伏して神の審判にゆだねまつる。そのような魂を神は責め給はない。神の赦しは碎けた魂に臨む、無条件的である。第十九節の如き言は何たる慰めぞ。神の仁慈^{みれん}はまことの立ち帰りを促すものである。不義を踏みつけ、罪を海の底に投げ入れる！ とは何たる熱き愛、深きみゆるしぞ！ 人の誹謗も非難も誤解も問題でない。

5月25日

嫉妬の火・神の隠衰
(ゼバニヤ書)

○彼らの銀も金も神の激怒の日には彼らを救ふこと能はず。全地はその嫉妬の火にて烏有に帰せん。実に彼は地に住む総てのものを破壊と速かなる終末に到らしめん。(二・一八)

◎汝ら神を求めよ！ 公義を行ふ地の謙る者よ、義を求め謙遜を求めよ、神の怒りの日に恐らく汝は隠されん。(二・二三)(三・一二、一三、一七、参考)

北王国イスラエルがアッシリヤに滅ぼされて七二一年から正に一世紀あとの六二一年に、南王国ユダのヨシヤ王(六四〇―六〇九)が発見した申命記法に基づいて宗教改革がなされたのだが、それ以前からこのユダ国で活躍していた大預言者はエレミヤであるが、彼と同時代に同じく憂国の至情に燃えて預言していた一人がゼバニヤ(原語ツェファニヤ、原意ヤハ「ヤハウエ」エホバ)は隠し給ふ)である。不信による偶像礼拝と社会悪を見て国家の危機を感じて、神の激怒の下に滅びると預言している。そんな時に金銀財宝が何になるか。今こそ平伏して神に立ち帰れよ、神が自ら隠衰になってやろうと語った。日本も第二次大戦の末期国民は金やダイヤの献納を強いられしたが、大きな見当ちがいをした為政者と軍部のため国民が犠牲となった。「嫉妬の火」とはエホバ神が妬む程にイスラエル・ユダの神への愛を求めている神の愛を表現する言である。信義を裏切る民族国家を滅ぼしても、なほ愛してやまないのがこの実存神であるが、その愛がどのような相で現はれるかは、預言の歴史が次第に啓示してゆく。

5月26日

戦乱と淫乱

(ナホム書)

○エホバは嫉妬(ねたみ)の神(エール)にして復讐者、憤怒(いかり)の主。(ナホム一・二上)
 ○禍(わざわ)いなる哉、流血の都市(まち)、虚偽(いつはり)に満ち、横領に溢れ、掠奪止むところを知らず。鞭打の音、車輪の轟、躍り趨る軍馬、躍進する戦車。突進する騎兵、刀剣は煌き、槍は閃く。屠られし者夥しく、死屍の数知れず。死体は無尽、人々は等の死骸に蹟く。而もこれは艶麗にして誘惑に巧けたる遊女のさわなる淫行のゆえに、諸国をその淫行によりて惑はし、諸族をその魔手によりて晦ましめ。(ナホム三・一四)

預言者ナホム(原語ナフーム、原意「慰安」)。ナホムはアッシリヤに亡ぼされたイスラエル(七二一年)の捕囚の民の子らの一人かも知れない。エホバによるアッシリヤ国に対する復讐は、イスラエルの罪を越えたア国の残虐に対する神の「慰め」の聖意と思はれる。ア国王アシュルバニバル歿後(六二五年)、ア国は衰退し、国内は紊乱を極めてゆく。首都ニネベはやがて新興のカルデア(新バビロニア)に紀前六一二年に壊滅されるが、そのニネベの滅びに関わる預言をナホムは啓示されたわけである。ア国は鷲や獅子に譬えられる犖猛残虐な種族で、而もまた淫婦の魔手を以て国の内外を乱したことも右掲の諸句で瞭かである。

さて二十世紀末の今日、淫行の恐るべき魔手はエーズに現はれた。癌よりも怖るべきサタンの魔手となって来た。人類の末路果して如何。神を畏れよ、平伏して祈るのみ。

5月27日

觀望塔

(ハバクク書1:2-2:3)

○エホバよ、いつまで我れ援助を叫びて、汝なほ聴き給はざるや。
我れ汝に「暴逆」娑汰を叫び訴ふれども汝救ひ給はず。(ハバクク一・二)
○我れわが觀望所に立ち、觀望塔に登りて覗ひ、彼が我に何を語り
給うかを視、わが訴へに對して我れ何を受くるかを視ん。エホバ我
に答へて言ひ給へり、「この啓示を書くべし、板に明記し、其を走
りつつも読み得るようにせよ。その啓示は尚來るべき時機に向ひ終
局を急ぎあるなり。これは虚しからず、遅れなば待て、必ず起こり、
滞りはせじ。(ハバクク二・一三)

アッシリヤが暴逆と淫乱で、国内も分裂を來たし、紀前六一二年にナボポラッセルがニ
ネベを占領し、カルデヤ(新バビロニア)を建てたが、これまたア國に勝る暴逆の相をそ
の子ネブカドネザル二世時代(六〇四―五六一)には呈して來た。ユダ國の存亡の危機が
迫つて來た。ナホムのあとを継ぐかの如く現はれたハバククは憂國の情ひとしほ深い。東
にはバビロニア、西にはエジプトの二大強國、国内は社会的混乱。彼は觀望塔に立つて、
天を仰ぎ、地を望観し、神に世は如何にして此くあるか。神は何を啓示し語らんとし給う
かを視たいのである。神は板に明記せよ、民衆が走つても読み得るようにせよと宣うた。
神はバビロニアの暴虐の相も視て居られる。しかしユダ國民の不信の相は更に深く憂ひと
怒りの内実なのである。ハバククは果して何を書かしめられるのか。

5月28日

義人生信
(ハバクク2:4)

見よ、彼の魂は驕りて直からず、その衷は義に非ず。
されど義人はその信に在りて生く。(ハバクク二・四)

エホバ神はハバククに命じて板に明記せよ、と。その天来の啓示は、右の一句であった。これが觀望塔で天を仰いで聴き且つ觀た文字であった。

前段は即ちカルデヤが野獸の如く強く驕って、神に対して直き關係にない。衷なる心は不信不義である。バビロン(カルデヤ)を以てサタンの相の代名詞としてゐるのは默示録である。暴虐と淫乱は人類の歴史の暗黒面である。

後段は、「されど義人はその信に在りて生く」。原語では僅か三語。それで漢文調で義人生信と表現した。信仰に在って生きてゐる者が義人であつて、義人はむしろ述語である。そのような義人の祖はアブラハムであつた(創一五・六)。大預言者イザヤが正にかかる信仰の唱道者にして身証者であつた(イザヤ七・九、二八・二六、三〇・一五)。そして新約のパウロが正にこのハバククの言を大きくとりあげた(ローマ一・一七、特にガラテヤ第三章)。ギリシヤ語七十人訳では「義人はわが信実によりて生く」とある。即ち神の本願の言で、神の不變の信実を体受、信受して生きる者が義人だといふのである。本願に裏づけられてこそ、人間の側の信が本ものとなる。本願の正信の主体たる全キリストを全存在で体受して生きるのが本当の信仰者で、義人である。

5月29日

因果応報

(オバデヤ 3, 4)

三 汝が心の高慢汝を欺瞞せり。岩の狭間^{はざま}に捷^すみその居高所^{きよたかき}に在りてその心の中にて言ふ、誰か汝を地に曳^ひき降^{おろ}さんや、と。
四 たとひ汝鷲^{わし}の如く高く挙^あるとも、たとひ汝が巢^{あな}を星の間に設くとも、我^{われ}汝を其処^{そこ}より引卸^{ひきおろ}さん、神^{エホバ}の言也。
五 汝に近^よし神^{エホバ}の日各民族の上に。汝のなせる如く汝にせらるべし、汝が応報^{おこし}汝が首^{くび}に帰り来らん。

オバデヤ（原意ヤハ「ヤハウエ」エホバ）の僕。彼は幻像をもつて啓示乃至預言を受けた。預言は専ら「汝」なるエドムに関はるもので、エドムはヤコブ（イスラエル）の兄エサウ（創三六・二）の子孫が住んでいた死海南方の高原地帯で、天然の岩の要塞がある。ユダ国とエドムは歴史的に必ずしもよい仲ではなかったが、ユダ国がバビロンのネブカドネザルに滅ぼされる頃は既に交友を裏切つてバビロンに左袒していた。この預言はユダ国人のバビロン捕囚（紀前五八七年）以降のものと判断されている。

ともあれ、エドムの高慢と裏切りが実は自分を欺くことになって、今に「神の日」の審判に遭つて亡びる、という預言内容である。「世界歴史は世界審判史である」とドイツの詩人シラーが謳っているように、民族も国家もその興亡の跡を辿ると靈的なまた道德的な法則がはたらいっている。個人の人生も亦然りで、「神の日」は随時臨む。そして悪因悪果、隱徳陽報が現はれる。決定的な終末的な「神の日」は黙示録に預言されているように来るであらう。ともかく、審判は神にゆだね、自らは神を畏れて生きんのみ。

5月30日

第二神殿建造の預言
(ハガイ書)

二・五
汝らが出エジプトをせし時、わが汝らに約せし言及びわが靈は汝らのただ中に留まりてあり。恐るる勿れ！^六げに万軍のエホバ斯く宣へり、いま一度^{ひとたび}暫らくせば我れ天と地と海と陸とを震動はん。我また万国民を震撼せん。さらば万国民の願はしきもの来たるべし。かくて我れこの神殿を栄光をもて満たさん。(二・五、六、七)

バビロニヤ王ネブカドネザルが南王国を亡ぼして、第二回バビロニヤ捕囚を行ったのが紀前五八七年、爾後半世紀ほど捕囚期が続いたが、新興のベルシャ王クロスによってバビロンが崩壊したので、捕囚の民は、クロスの勅命によって紀前五三八年にエルサレム帰還となった。出エジプトはイスラエルの民のエジプトに於ける奴隸的苦役からの解放で艱難からのあがないであつたが、そのときモーセを通してエホバ神はイスラエルと神と民との契約が結ばれた(二・五)。エホバの神靈は彼らと曠野の旅をして幕屋を神殿として臨在していた。それは動的な相であつた。

此度の出バビロンは、神への不信の罪による捕囚からの解放で、罪のあがないの意味をもつものである。帰還したら、何はさて置き、神殿建造が成さるべきなのに民はこれを怠っていたので、神は預言者ハガイを通してこれを責めた(ハガイ・七一)。神は靈震を以て天地と諸民を震い畏れしめ、神殿建造のため「願はしきもの」を献納させると宣うている(二・六、七)。ソロモンの第一神殿に優るほどの第二神殿への預言が四回に亘ってなされているのがハガイ書の内容である。爾後神殿宗教に固定したのが所謂ユダヤ教。

5月31日

相互帰入

(ゼカリヤ1-8)

○万軍のエホバ^か歎く言ふ「汝ら我に帰れ。我も汝らに帰らん」(一・三)

○我と語る天使我に言ひけるは「汝呼ばはりて言へ。万軍のエホバ^かく言ふ、我れエルサレムの愛に甚だしく心篤く、妬みを覚え、^{二五}安閑たる諸々の国民を大いに怒るそは我少しく怒りしに彼ら力まかせにこれに加害したればなり。エホバ^かく言ふこの故に我れ憐憫をもてエルサレムに帰る」と。(ゼカ一・二四-二六)

出バビロン後、紀前五二〇年二月にハガイと同じく彼に引き続き預言に与^あった集團的性格の預言者がこのゼカリヤであるが、ゼカリヤ書一―八章が五一九年二月のある夜ゼカリヤに示された八個の靈幻を主題としている黙示的預言である。ハガイもゼカリヤも神殿構築の立役者ゼルバベルをメシヤと見做したことは、いかに神意によって単独的に召命される預言者と次元と性格が違^{ちが}うかがわかる。神殿宗教へ向っている点に於てやはり祭司的それはとも角、右掲の諸句には真の預言の閃きを見る。「汝ら我に立ち帰れ！」神に立ち帰ることが信仰の真の相^{すがた}で、而も神自らの「我も汝らに帰らん」との親しい愛の迫りの言を聞いては全く参^まりてしまふ。アッシリヤ、バビロニヤが神意の限度を越えて北イスラエル、南ユダに残虐をなしたことに對して、神のあはれみが深く語られていることは注目すべきである。両国は不信のために滅亡したが、国亡びて民族は亡びず、神の愛の追求は、イスラエルの真の預言者らを通して、そして遂にイエスという超預言者を通して神の全人類への救の道が開かれたのである。